

沓冠折句の歌といへるものあり。十文字あることを、

句の上下に置きて詠めるなり。

「合はせ薰き物少し。」といへることを据ゑたる歌、

逢坂も果ては行き来の 関もるず

訪ねて来ば来 来なば帰さじ

これは、仁和の帝の、方々に奉らせ給ひたりけるに、

みな心も得ず、返しどもを奉らせ給ひたりけるに、広

幡の御息所と申しける人の、御返しはなくて、薰き物を奉らせたりければ、心あることにぞ思し召したりけると、語り伝へたる。

「女郎花・花薄」といへることを、据ゑて詠める歌、

小野の萩 見し秋に似ず 成りぞ増す

経しだにあやな するしけしきは

これは、下の花薄をば、逆さまに読むべきなり。これも一つの姿なり。